大学をハブに 研究、医療、まちづくりを

熊本大学長 小川 久雄 × 熊本市長 大西 一史 氏

第12回目は熊本市長の大西一史氏をお迎えして、「市と大学の連携によるまちづくり」をテーマに対談しました。菊陽町に台湾の半導体受託生産の世界最大手、TSMC（台湾積体電路製造）が進出するなど、熊本にとって大きなチャンスが到来している中、行政と大学との連携や人材育成、文化振興などについて、幅広い意見が交わされました。

世界的に注目される熊本

―TSMCで盛り上がっている今の熊本で、どんな人材が必要とされているのでしょうか。

大西　今までの行政の職員は、与えられた課題をマニュアル通りに、計画的に実行していくことが求められていました。しかし今は答えが一つではないことについて、判断をしていかなければならない時代です。いろんなことに興味を持って、一つの物事に対して多角的に見ることのできる人材が必要です。市の職員にも様々な勉強をして視野を広げ、どんどんチャレンジして、市民にとって何が大事なのか、本質を追求してほしいと言っています。人材育成には、さらに力を入れていきたいと思っています。

今、半導体関連企業が熊本に進出してきて、世界的に注目される中、熊本を起点にイノベーションを起こせる人たちが求められています。大学で学びながら起業をしていく人たちも出てくると思います。今はSNSで手軽に世界中に発信できる時代。発信力のある人を育成していくこともこれからの熊本にとって重要だと思います。

小川　半導体関連企業からの大学への求人も大変多くなりました。

大学は、専門的な知識を身に付けた人材を供給していかなければなりません。私は2021年に学長になりましたが、ちょうどその年の秋にTSMCの進出が話題になりました。大学でも半導体分野に力を入れようと、他大学や企業から半導体人材を集めて、まず2022年に先端科学研究部附属半導体研究教育センターを立ち上げました。さらに2023年4月に全学組織へと発展させ半導体・デジタル研究教育機構を設置しました。幸い、国からの支援もあり、来年度に研究、教育のための2棟を建設予定です。

大西　すごいことですね。

小川　2024年春には、半導体にかかわる新学部相当の情報融合学環を開設します。新しい建物にはその学生や教員が入ります。百年に一度のチャンス。もう二度と来ないという覚悟でやっています。半導体に関する優秀な人材を東京や京都、東北からも集めています。さらに東京大学の分室を熊本大学に設置することになりましたが、これは東大でも初めての取り組みです。大学のレベルを上げていくチャンスだと思っています。

大西　百年に一度ですからね。

小川　熊本大学は伝統のある大学で、熊本藩が開校した再春館からいうと

2023年2月10日、熊本大学キャンパスミュージアム講演会「日比野克彦氏～アートの力～」が開催された。

268年です。伝統を大事にしながら、今何をやるかが一番大事なので、需要に応じてやっていきたいと思っています。熊本市でもTSMCの進出に伴い、外国人労働者やその家族の移住が増加することが予想されます。そこで市にお願いしたいことがあります。仕事のために単身赴任するのは日本特有なんですね。海外から家族帯同で赴任されるときに大事なのは、その子女の教育環境整備です。熊本大学教育学部の附属小学校と中学校に外国人子女等を受け入れるため、国際クラスを設置する計画です。教える人材の派遣などを市の教育委員会にご相談させていただきたいと考えています。

交流で双方のレベルを上げる

―大学と行政の連携の話が出ましたが、今後、どのように連携できそうでしょうか。

大西　熊本大学とは包括連携協定を結んでいるので、これまでも人的な交流や地域での活動など、連携して取り組んできています。

また、熊本市の教員は、熊本大学教育学部の出身の方が多くいます。熊本市の教員と大学の先生方とがコラボレートすることによって、教えるスキルも上がっていくと思います。私たちも最大限協力したいと思っています。

小川　行政との連携について、思い出したことがあります。私は国立循環器病研究センター（大阪府吹田市）の理事長をしていましたが、吹田市と大阪府から職員が派遣されて来ていました。北大阪健康医療都市というまちづくりのためです。職員がいることで、市との話がスムーズでした。私もこれから市長にどんどん電話しようと思います（笑）。

大西　私からも先日、電話させていただきました。学長とホットラインがつながり、今まで以上に熊本大学を近くに感じています。

熊本市でもAIやデータサイエンスに関して、研究をしています。熊本大学ができるとのことで、今後、大学と連携しながら研究をしていくことは非常に重要だと思います。

小川　教職大学院には、熊本市の公立学校で長く教職の経験がある前田康裕先生が特任教授として就任しています。前田先生が参画する情報教育研修会の取り組みで、2021年にデジタル社会推進賞デジタル大臣賞「銀賞」を受賞しました。お互いに交流することでレベルが上がるので、今後、ますます活発に交流したいと思っています。

アートの世界はグラデーションだからこそ、解決できる課題も

―文化や芸術の分野でも連携されていますね。

小川　熊本大学には五高記念館、化学実験場、赤門、工学部研究資料館の4つの国指定重要文化財があります。五高記念館は1889年にできた立派な建物で、熊本地震で一部損壊しましたが、多くの皆様からのご支援により、2022年に復旧が完了しました。五高記念館を中心として文化芸術の振興を進めていきたいと思ってい

熊本を起点に イノベーションを起こせる人材が必要

熊本市長 **大西 一史氏**

熊本市出身。日本大学文理学部心理学科卒。九州大学大学院法学府法政理論専攻、博士後期課程単位修得退学。1992年日商岩井メカトロニクス(株) 入社、その後衆議院議員秘書を経て1997年より熊本県議会議員を5期務める。2014年、熊本市長に当選。現在3期目。趣味は、読書、音楽鑑賞、ドラム演奏など。

O N I S H I　K a z u f u m i

ます。熊本市は東京芸術大学長の日比野克彦さんを現代美術館の館長に招かれています。

2月10日には熊本大学キャンパスミュージアム主催で、日比野さんの講演を行いました。今後も連携して熊本の文化芸術を高めたいです。

大西　熊本城内のNHK熊本会館跡地の発掘調査で、鉄の刀が出土しました。熊本大学のキャンパスミュージアム推進室と合同で調査をした結果、銘文が出てきて非常に大きな成果が得られました。文化財の調査研究や歴史教育に関しても、熊本大学には素晴らしい先生方がいらっしゃいます。こうした連携もやっていきたいと思っています。

日比野さんを現代美術館の館長としてお迎えした後、熊本市の文化顧問に就いていただきました。今までの行政のアプローチは白か黒かということが多かったのですが、アートの世界はグラデーションだとおっしゃいます。市民の抱える課題について、今までのアプローチでは解決できなかったことも、アートの力で解決できるのではないかと、東京芸術大学で先進的な取り組みをされています。私たちも一緒に取り組んでおり、東京芸術大学と熊本大学、熊本市との連携がさらに広がっていくのではと思います。日比野さんは熊本市役所の中にどんどん入り込んで「ご用聞き」をなさっているんです。そこでアプローチの仕方などアドバイスをいただいています。これからどう変化していくか、期待しています。

小川　私は大学のグローバル化と融合を考えています。文系と理系も融合させたい。例えば縄文土器をCTスキャンで解析している学者がいます。もともと工学部で石の解析に使うCTスキャンを、土器に使っているんです。このような理系と文系の融合をますます進めたいと思っています。芸術も融合することによって、また新しいものができるのではないかと思います。

大西　東京藝術大学の日比野学長に来てもらっていますし、東京大学の分室ができるという話もありました。東京に行かなくても、熊本にいながら非常に高度な研究や学びができそうですね。人材育成の話にもつながりますが、熊本大学を一つのハブにしてどんどん広がりができていきますね。今からの熊本大学に求められることではないかと期待しています。

小川　大学はもっともっと変わらないといけないと思います。北里柴三郎は熊本藩の古城医学校で3年間、オランダ人軍医マンスフェルトに学んで、東京に行き、さらにヨーロッパに行って学びました。同じように熊本で学んだ人が各地で活躍するようになると思います。一方、企業がたくさん来ますので、学生の就職の幅が広がり、熊本に残る率が高くなっていくことでしょう。

大学は、活性化を牽引する重要な地域資源

―「大学をハブに」という話がありました。地域貢献についてはどうお考えでしょうか。

大西　大学は地域の活性化を牽引する重要な地域資源であると思っています。学生さんが全国各地から熊本大学に来ています。大学生の皆さんが地域の方々と一緒に地域活動に取り組んでもらえるといいと思います。4年間だけかもしれませんが、地域の一人として活動すれば、新たな学びになり、自分の人格形成や人生の経験を積むことにもつながります。

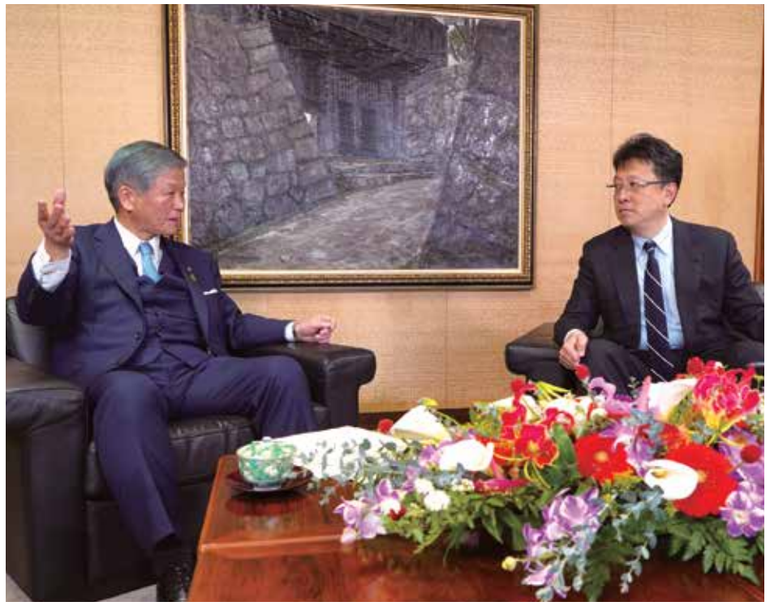
ここで一つ宣伝になりますが、4月から「くまもとポイント」という制度をスタートします。これはアプリケーションをダウンロードしてもらい、自治会活動や防災活動、清掃活動などに参加したらポイントがたまる仕組みです。ポイントは様々な特典や景品等との交換ができます。気軽に地域の活動に参加するきっかけになればと思っています。学生さんも地域活動に参画をしていくよう、学長からも呼びかけていただきたいと思っています。

小川　熊本大学の学生は1万人いて、地元出身者は3割ぐらいです。ほかの地域から来ている人も多くいます。まちづくりには「よそ者」の力も大きいですね。最近の学園祭では、五高記念館をバックにプロジェクションマッピングをやったり、ジャズの演奏をしたりしているんです。

大西　実は、学園祭での演奏に誘われたんですよ(笑)。セッションする予定だったのですが、日程の都合がつかず残念でした。

日本でトップクラスを誇る熊本の医療ネットワーク

小川　熊本の医療システムは意外と知られていないんですが、特に脳卒中と心臓病に関するネットワークは日本でおそらくトップクラスです。全国に先駆けて構築された「くまもとメディカルネットワーク」もあります。病院や診療所、薬局、介護施設などを結び、同意した患者さんの診療・調剤・介護に必要な情報を共有し、医療・介護サービスに活かすシステムです。今、12万件ほどのデータを蓄積しています。企業との連携はなかなか難しいと言われますが、これこそ企業と連携して、データを有効に活用できるようになると、患者さんにも役立ちます。厚生労働省でも熊本の医療ネットワークは注目されています。もっと市民の皆さんに知っていただきたいと思っています。



大西　医療の充実のため、熊本大学医学部には非常に大きな役割を果たしていただいています。くまもとメディカルネットワークもいろんな施設が連携しています。情報が自分たちの健康、ウェルビーイングにつながっていくんだと、知ってほしいと思います。ポイント事業とコラボレーションができればいいですね。

小川　それはいいですね。

大西　熊本市は今、データサイエンスの分野で実証実験を始めています。市民の健康を守るため、予防医療の分野が非常に重要です。医師会や大学医学部とも今後さらに連携しながら、行政データを活用した研究を進め、その結果をもとに予防検診事業に反映させるなど、より効果的な取り組みができればと思っています。病気を予防してQOL(クオリティ オブ ライフ)を保ち、人生を豊かにするためにはそうした分野は大事です。保健医療の分野は行政の中でも重要だと思っています。

小川　学長になって、地域との連携の大切さに気付きました。予防医療は大事なので、ぜひ一緒にやりましょう。それに大切なのは情報共有です。熊本はまとまりやすい規模だと言われます。そうしたことを生かしていけたらと思っています。

グローバル化と融合を進め大学のレベルを上げるチャンス

―最後に大西市長から熊本大学への応援メッセージをお願いします。

大西　熊本大学では非常勤講師として教壇に立った経験もありますし、今も法学部で時々講演をするなど、私にとって親しみのある大学です。熊本大学は熊本市にとって大事な存在です。

小川学長のスピーディーで的確な判断とリーダーシップで、時代を捉えて大きく変革されていると思います。新しいことを取り入れるため、勇気を持ってチャレンジされていますので、私も見習いたいと思っています。これから世界に羽ばたく人材をどんどん輩出していく、素晴らしい教育機関として大変期待しています。

小川　本日はありがとうございました。

O G A W A　H i s a o

1978年熊本大学医学部卒。1984年より31年に渡り、当大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。2016年国立循環器病研究センター理事長に就任。2021年4月、第14代熊本大学学長に就任。専門分野は循環器内科学。学生時代は野球に夢中。徳島県出身。

第14代熊本大学学長 **小川 久雄**